

論文の和文要旨

論文題目

日本における戦争記憶と日中関係の変容：教科書、博物館と歴史に関する議論（1972-2017）

氏名

Zou Yi

一九七二年に日中外交関係が正常化して以来、両国間の経済・文化協力活動は絶えず強化されてきている。しかし、中国と日本の間にある歴史認識問題はまだ完全に解決されておらず、依然として二国間の関係に影響を及ぼしている。日中関係は一九七二年から二〇一七年にかけて動的に徐々に変わっていくのと同時に、日本国内における歴史認識と戦争記憶も一層変わっている。日中関係や、日本人の歴史認識、また日本人の戦争記憶における動的な変化の間にみられる関係を見つけ出すことが、本研究最初の目標である。

本研究の理論的な枠組みは、メモリースタディーズ(Memory Studies)に基づいて構築されている。メモリースタディーズの論理によると、社会に構築された概念としての集合的記憶は、様々な文化的実体によって表象化することができる。したがって、社会のコンテキストは如何に日本人の歴史認識を構築しているのか、また如何なる文化実体によって日本人の戦争記憶をどのように具体化・表象化させたのかを追跡することが、本研究の第二の目標である。

本研究は、一九七二年から二〇一七年の間に出版された117冊の歴史教科書と37ヶ所の戦争博物館を研究対象として選んだ。また、日清戦争(1894年)や、満州事変(1931年)、盧溝橋事件(1937年)、南京大虐殺(1937年)、「慰安婦」、七三一部隊、「三光作戦」、沖縄戦と原爆投下(1945年)などの事例を通じ：(1)日中両国の間に起こった戦争に関する記述は、いかに歴史教科書と戦争博物館に描かれているのか；(2)時代の変遷につれ、戦争に関する記述はどのように変化していくか、などの問題をめぐり、観察・分析をおこなった。

研究結果によって本研究は次のような結論を出している。まず、日本国内の政治環境が戦争に関する記述及び戦争記憶の傾向を決定づけているものの、中国の対日外交政策も、日本人の歴史認識と戦争記憶を形成と再形成に重要な役割を果たしていると考えられる。次に、歴史教科書と戦争博物館の記述分析を通じて、戦争に関する記述の異質性は戦後の日本社会において常に存在していることが観察された。

最後に、戦争記述の傾向では、「保守的な視点」が七十年代に反映された一方、八十年代と九十年代の戦争記述の傾向は「進歩的な視点」に移り変わっている。また、二〇〇〇年代では「不完全な進歩的な視点」との傾向がみられ、2010年代になると「保守的視点」と「ナショナリスト的視点」との間に据える傾向が観察された。

本研究は、1972年から2017年までの日中関係における歴史認識問題の位置づけの変化を観察し、日本における歴史認識と戦争記憶の変化を捉えることにより、今後の日中関係を改善する新たな視点を提供することを期待している。

本論文は以下の5つの章に分けられている：

第1章：先行研究と理論的な枠組み；

第2章：日中関係と歴史認識問題に関する議論；

第3章：歴史教科書と戦争記述分析（1972-2017）；

第4章：戦争博物館と戦争記述分析

第5章：終章